開催地名	大阪府泉大津市
開催日時	令和6年1月24日(水) 9:45 ~ 11:30
開催場所	泉大津市立楠小学校 体育館
語り部	丹野 祐子 (宮城県名取市)
参加者	児童5年生、担任 80名
開催経緯	東日本大震災から 13 年が経とうとしている。現在の小学生は、東日本大震災を経験し
	ていない世代である。しかし今後数十年で、南海トラフ地震が発生すると言われており、
	過去の大地震を風化させることなく、学びを深め、そして防災意識を高める機会を作り
	たいと思い、開催に至った。
内容	

東日本大震災が教えてくれたこと

(1) 閖上の記憶(2時限目)

閖上地区は、川や田んぼが広がりとてものどかで平らな土地である。東日本大震災の あの日は、娘の中学校の卒業式の日でもあり、中学一年生の息子と3人で閖上中学校に いた。卒業式が終わり謝恩会で皆とお弁当を食べたあとおしゃべりをしている時に、地 震は起こった。揺れては止まり、揺れては止まりを繰り返し、時間で3分間も揺れが続 いた。初動の揺れから1時間6分を経過した時、なんと9メートルの津波がやってきた。 東北に住んでいるので地震後に津波が来るかも知れない、ということは事前に認知はし ていた。が、知っていただけ。経験をした事がないから理解すらできていなかった。例 を挙げると、赤ちゃんが暑い冷たいという感覚を経験した事がないために、何も考えず いろんな危険なものに触れてしまうのと同じで、津波が来たらどうするべきか認識でき ていなかったのである。皆で散り散りになりながらも2階、あるいは3階へと避難した。 その時に娘の姿は見えていたが、息子の姿を目視で認識することはできなかった。必死 に声を上げ捜しまわったのだが、次に息子と再会することができたのは、2週間後棺に 入って眠っている状態であった。

助かった人たちは、日本のみなさんの協力により、いろんな援助を受けながら過ごす ことができている。だが亡くなってしまった子どもたちの、生きた証すら全て津波が吞 み込んでしまったのである。

そこで私は、そんな子どもたちのことをずっと忘れてほしくないと『閖上の記憶』を 立ち上げ慰霊碑を作り、いつまで経っても誰であっても、あの日の事を語れる場所を作 ったのである。

あの日から7年後、同じ地域に新しい家を建てたが、そこには息子の部屋もあるのだ。 いつも読んでいたマンガの続きを読ませてあげたくて、息子の姿が見えなくなってしま ったあの日からずっと待ち続けている。

今後、このような悲しいことが起こらないように、1件でも被害を少なくするために 活動を始め、いざという時のためにも日頃から大切な人の命を大事に、ご両親を大切に 生き続けてほしい。

(2) 質疑応答(3時限目)

避難所での生活は1か月以上にわたり、身内だけでなく地域の方々と1つの毛布を2人で分け合い、雑魚寝を強いられるなど非常に過酷な状況の中、自衛隊が炊き出してくれた温かい食事を頼りに、毎日がれきの中に身を置き行方不明者の捜索に従事する日々であった。そんな日々の中で、息子の友達が元気に過ごしている姿を目にすることは、とても心的に辛く、災害がもたらす不安と共に他者の元気な姿に心が揺れたのである。

地震に追い打ちをかけるように到来した津波は、本来であれば大きな建物や山にぶつかって海へと戻っていくが、遮るものがない閖上地区においては、津波がどこまでも進み大きな打撃を与えた。街を飲み込んだその後、閖上地区は閉ざされてしまい国から家を建てる許可が出るまで約7年もの歳月を要したのである。

現在も尚、2000人以上の行方不明者がいることについては、非常に残念なことあるが、少しでも早く多くの方が無事に見つかってほしいと心から願っている。

被災当時、救援物資が3日後に到着したという経験から、3日分の水や食糧などを緊急時に備えて準備しておくことが重要であることを学んだ。自分や家族の安全を確保するためにも、予め災害に備えておくことが重要であると共に、被災地への迅速な支援がいかに生死を左右するのか。ということも重ねて痛感したのである。中でも支援物資で一番助かったのは意外にも着替えであった。災害の中で清潔な衣類を手に入れられたことは、心身の安定に大きな影響を与えたと考える。





開催地より

東日本大震災を経験された語り部様から、被災状況やその時の行動について、子どもたちにわかりやすく伝えていただいた。また事前学習していた子どもたちからの質問にも、一つ一つ丁寧に答えていただき、深い学びに繋がった。今後は、より防災の意識を高め、備えの強化ができるようにしていきたいと思う。